

# オリンピックと日本の参加

増 田 靖 夫

日本から始めてオリンピックに参加したのは、数人のアイヌ人だという話がある。1904年アメリカのセントルイスで、開かれた第3回大会に余興として「人類学の日」が催された。これは各人種の運動能力をテストするのが目的で、その実験台にアメリカのインディアンや、アフリカのピクミイ族や、フィリッピン Moro 族などに交って日本のアイヌ人などがあつた。

アイヌ人がオリンピックに参加したのは間違いないが、これは正式の参加とはいえず、日本とオリンピックの歩みは、一九一二年スエーデンのストックホルムで行なわれた第5回大会に始まるのである。

第18回オリンピックは1964年日本の首都東京で開催されることになったが、日本がオリンピックに正式に参加したのは、1912年の第5回ストックホルム大会で、今度の東京大会は日本としても10回目の参加であり、意義深いものがある。その間大戦の混乱その他大きな波があつたが、50年間の日本スポーツ界の歩みはそのままオリンピックの記録に現われているようだ。ここで近づく東京大会を前に日本と、オリンピックとの歩みをふり返ってみよう。

日本のオリンピックへの正式初参加は、第5回ストックホルム大会（1912年）である。オリンピック参加のすすめは、1910年頃クーベルタンIOC会長から日本の嘉納委員にあつた。1911年嘉納氏らのきもいりで、大日本体育協会が誕生した。今からみると時代がかった、予選会の結果決つたのは、マラソンの金栗四三氏（東京高師）短距離の三島弥彦氏（東大）の両選手だった。とくに金栗氏は25（マイル）マラソンで2時間32分45秒で当時の世界記録を27分破つた、というので大変な騒ぎだった。マラソンは陸上競技の代名詞にまでなつたが後年マラソンが日本の伝統種目の一つになつたのもこのあたりに起源があるのかもしれない。

その第5回ストックホルム大会には、世界各国から28カ国が参加して14種目の競技を行ったが空前の盛況で、日本代表選手が初めて参加した意味で日本スポーツ史上に特記される大会だった。入場式には金栗選手がプラカード三島選手が日の丸の旗をかかげて行進した。日本国民があげて期待したマラソンは、67人が出場暑さのため34人が落伍する難レースで金栗選手も16（キロ）あたりで腹痛を起こして棄権してしまった。三島選手は100—200米とも第一予選で失格 400 米は準決勝で棄権した。成績こそ振わなかったが、日本選手の一行は持ちきれない程の多くの体験を得て意義深い大会であった。次の第6回大会（1916年）は第一次世界大戦のため中止となった。

第一次世界大戦のあと8年ぶりで日本が参加した第7回アントワープ大会（1920年）には嘉納団長以下、陸上、水上、庭球、の3種目に19人の役員選手を送った。マラソンに連続出場の水泳選手は16位にとどまり、揺籃期にあった水泳もふるわず熊谷、柏尾両選手の庭球4チームがめざましい活躍をした。当時日本の庭球界は世界の最高水準にあった。熊谷選手は1919年全米ランキングの3位、この年は全米1位のマレー2位のチルデンを破り7つの選手権を持っていた。オリンピックでは決勝で南アフリカのレイモンドに破れ番狂わせと騒がれた。熊谷、柏尾選手のダブルスも2位で優勝こそ逸したが、日本の庭球界を世界に強く印象づけた功績は大きかった。

次の第8回パリ大会（1924年）には、日本の選手団も31人にふえた。陸上競技では織田選手が、3段跳で6位に入賞、世界のレベルへの貴重な足がかりをつくった。水泳もクロールをはじめてみたというストックホルム大会からわずか4年の間にすばらしい進歩をみせた。高石選手が100米自由型で4位、1500米で5位に入賞 800米リレーの4位とあわせて水泳日本の将来を予約した。レスリングでの内藤選手の活躍もみおとすわけにはいかない。当時ペンシルバニア大学レスリング部の主将で日本では知られていなかったが、フェザー級で堂々3位に入賞している。庭球では準々決勝で原田選手が敗れているが水泳といいレスリングといい後年の隆盛と思いを合わせてパリ大会頃が日本のスポーツ界のれい明期であった。

第9回アムステルダム大会（1928年）に日本は7種目に56人の役員選手を送った。

この大会で特記されるのは3段跳に織田選手の優勝である。オリンピック参加以来16年ぶりに日本は初めてのタイトルを獲得した。更に南部選手も4位入賞両選手の活躍で跳躍日本の黄金期がこの大会からはじまったわけである。

走高跳では木村選手棒高跳でも中沢選手がそれぞれ6位に入賞している。マラソンでは山田選手が4位津田選手が6位に健闘した。この大会からはじまった、女子種目では人見選手が八百米でラトケ（ドイツ）と劇的なレースを演じて二位にはいった。

水泳もこの頃からアメリカに対して目立った挑戦をはじめていたがまだその王座を、くつがえすまでにはいたらなかった。特記されるのは200米平泳に、鶴田選手の優勝で日本の水泳界に初の金メダルをもたらしたのは、陸上の織田選手と好一对である。連続出場の高石選手は100米自由型で3位、背泳の入江選手も4位に入賞、800米リレーではアメリカについて2位に入った。この大会は日本に大きな刺激を与え外国選手の泳法記録からかすかすの貴重な研究資料を得た。こうした努力が次のオリンピックで日本の世界制覇へとつながったのである。

馬術総合では城戸少佐が21位純馬術では岡田少佐が10位遊佐中佐が18位となりレスリング、ボクシング勢もまだ力不足で1・2回戦で敗退した。

第10回ロサンゼルス大会（1932年）ではアメリカは豊富なる財力と十分なる時間的余裕に恵まれて、設備は世界一を誇るほど立派に整った。39カ国1700人の選手が参加した。日本は水陸に花々しい活躍をみせた。

陸上では3三段跳に、南部選手が15米75の世界新記録で優勝、大島選手も3位に入って2本の日章旗をあげた。100米で吉岡選手の6位入賞も特筆されることで、激戦の短距離での入賞は今日まで吉岡選手ただ1人である。棒高跳では西田選手とミラーが激しい優勝争いを演じて西田選手が2位となった。跳躍は書き入れ種目で走り幅跳でも南部選手が3位、児島選手が6位に入賞した。マラソンでは津田、金両選手が各々5・6位にはいり日本は36点をあげて陸上競技参加チームの5位を占めた。

水泳チームは6種目中五種目のタイトルを独占して“水上日本”の名をほしいままにした。1位を落したのはクラップ（アメリカ）、タリス（フランス）、に大横

田、横山両選手がおさえられた男子400米自自由型だけで、この大会から400米は日本にとって鬼門の種目になった。自由型100米では宮崎、河石両選手1500米では北村、牧野両選手平泳200米では鶴田、小池両選手がそれぞれ1・2位を占め背泳100米では清川、入江、河津3選手が3位迄を独占、八百米リレーでは競技史はじまって以来の8分台の世界新記録で優勝するなど、アメリカの王座をくつがえして、無敵の強味を発揮した。

北村、牧野、宮崎、小池の各選手は当時いずれも中学生の新鋭で世界の檣舞台において気を吐いたものである。女子では平泳の前畑選手が2位に入賞、女子で初の日章旗をあげた。

馬術では西中尉が健闘し大障害では見事に優勝した。後年花々しい活躍をみせる体操もこの大会に初参加、団体で5位となっているが、まだトップレベルには遠くレスリングも1・2回戦で姿を消している。ホッケーも初参加してアメリカを、9-2で破りインドに11-1と完敗した。

第11回ベルリン大会（1963年）には日本は11種目に119人の大デレゲーションを派遣した。参加は54カ国5000人余で空前の開会式が行われた。この大会でも日本は水陸に好成績を残した。陸上3段跳では田島選手が、16米の世界新記録で優勝、織田、南部両選手について3度この種目の王座を確保した。更に原田選手も、2位に入賞、走り幅跳では田島選手が3位、棒高跳では西田、大江両選手とメドウズ（アメリカ）が接戦を演じて2・3位を占めるなど跳躍日本はこの大会でも大いに名をあげた。

またトラック5000米、10000米では村社選手が共に4位に入賞強豪に食いさかった、劇的なレースは今尚語り草になっている。一方日本がオリンピック参加以来意欲を燃し続けてきたマラソンでは孫選手が宿望の優勝を飾り、南選手も3位に入った。女子では中村選手が円盤投で4位山本選手が5位に食い込むなどヘルシンキ、メルボルンの不振と思ひ合せると当時の陸上界は世界水準に近かった。

水泳ではこどもも日本とアメリカが鎬を削った。日本の優勝種目は、寺田選手の1500米自由型、葉室選手の200米平泳、800米リレーと、女子で前畑選手の200米平泳、の4種目にとどまった。400米はメデイカ（アメリカ）のために再び涙をのんだ。100米はチック（ハンガリー）が日本選手をおさえ、背泳はキープアー（アメリ

カ)が清川、児島、吉田選手をおさえた。200米平泳は3段跳と同じく3連勝だった。特に印象深いのは200米平泳に前畑選手の優勝であった。

ゲネンゲル(ドイツ)と猛烈なせり合いを演じたが女子で“君が代”を吹奏したのは前畑選手が後にも先にもただ一人で特筆されることである。

初参加のサッカーは優勝候補といわれたスウェーデンを、3-2で破る金星をあげたが、準々決勝でイタリアに8-0で破れバスケットボールも、3回戦でメキシコに28-22で敗れた。体操、ボクシング、レスリングは特に目立つ記録こそないが、徐々に世界のレベルに近づいたのもしい活躍をみせた。

第12回大会と第13回大会は第2次世界大戦で中止となった。

第12回オリンピックの開催に、日本は強い誘致運動を展開、昭和11年7月ベルリンで開かれた、国際オリンピック委員会総会で、東京36票に対してヘルシンキ27票で、オリンピックは始めてアジアの地、東京で開催されることになった。

しかしその後中国との事変の進展で開催不能の状態になり遂に折角の東京大会も返上のやむなきに至った。この結果決った、ヘルシンキ大会も第2次世界大戦で開催不能となり、更に第13回に決ったロンドン大会も大戦のため実現しなかった。

第14回大会は大戦のため中止になった、第13回の開催予定地ロンドンで1948年に行われた。これは第2次世界大戦の終了した年に、ロンドンで国際オリンピック委員会の実行委員会が開催され、1948年に第13回大会開催予定地ロンドンで第14回オリンピックを開催することを決定した。

戦前のベルリン大会以来12年ぶりに行われたこの大会には58カ国5000余人が参加したが日本は戦争のため国際競技連盟から除外されていたために参加出来なかった。

次の第15回ヘルシンキ大会(1952年)から、日本がオリンピックに復帰、敗戦の疲労の中から日本は12種目に117人の選手団を送った。

しかし戦争のブランクはあまりにも大きく、陸上では3段跳に飯室選手、棒高跳到沢田選手が6位、女子円盤投に吉野選手が4位にはいったにとどまった。特にトラック種目では日本は世界のレベルから大きく引きはなされてしまった。

水泳も既に社会人となった古橋選手に全盛期の力はなく、決勝で8位という気毒

な成績で、優勝種目は1つもなく、100米自由型で鈴木選手、1500米自由型で橋爪選手が、それぞれ2位に、800米リレーでもアメリカに敗れてしまった。

しかしこの大会で特筆されるのはスポーツ日本の新しい勢力、レスリング、体操の台頭だった。レスリングのバンタム級では石井選手が優勝、フライ級では北野選手が2位、フェザー級の富永選手、ライト級の霜鳥選手、ウェルター級の山崎選手も各々5・6位に入って気を吐いた。

体操も好成績で団体総合では、5位にとどまったが個人種目で、上迫選手が徒手、竹本選手が跳馬で、共に2位に入賞した。

第16回メルボルン大会(1956年)は、始めて南半球で開かれた、この大会に日本ではヘルシンキ大会について、レスリングと体操チームが活躍しその成績は前回は上回った。陸上はマラソンの川島選手が1人5位入賞という惨敗に終わった。

水泳では古橋選手につぐホープ山中選手がローズ(豪)と世紀のレースを展開したが、遂に2位に終り水泳の金メダルは、伝統の平泳に古川選手が獲得した、ただ1つにとどまった。バタフライ200米では石本選手が2位、800米リレーで日本は4位に終わった。アメリカと日本に代る新勢力として、オーストラリアの充実が目立った。

躍進を続けるレスリングでは、フェザー級の笹原選手、ウェルター級の池田選手が優勝、フライ級浅井選手4位、ライト級笠原選手2位、バンタム級飯塚選手、ミドル級桂本選手ともに5位、と全員入賞の好成績だった。

体操では男子が団体はソ連と優勝を争って2位、個人でも小野選手が総合2位、竹本選手、久保田選手も種目別で上位に入賞、女子では徒手で田中選手が4位、団体で6位に初入賞、日本体操界のレベルの高さを示した。

初参加の重量挙げではライト級の大沼選手、フェザー級の白鳥選手、バンタム級の南部選手がそれぞれ4・5・6位に入り、世界水準への足がかりをつくった点で、大きな意義があった。

次に第17回ローマ大会(1960年)は、日本は競技16種目に、218人の役員選手団を送った。これはベルリン大会の249人に次いで2番目の大デレゲーションである。

その競技成績は、我々の記憶にも新たなように我々が一番期待をかけていた、競

泳（男子）レスリング（フリースタイル）も破れたが、体操競技（男子）が気を吐いた程度であった。

入賞は競泳男子山中選手が400米自由型に2位、大崎選手が200米平泳に2位、800米リレーに2位、400米メドレーに3位、又女子競泳の田中選手が100米背泳に3位、の良い成績をあげた。

体操競技は男子の部で日本が総合優勝し、個人総合及び種目別でも小野、鶴見、遠藤、竹本各選手が大いに活躍した。女子も団体総合で4位、個人では池田選手が6位に入賞した。

その他ボクシングでフライ級の田辺選手が3位、レスリングのフリースタイルで、フライ級の松原選手が2位、バンダム級で浅井選手が4位、フェザー級で佐藤選手が4位、ウェルター級で兼子選手が4位、と日本が期待していた種目としては余り良い成績ではなかった。

ウェイト、リフティングで三宅選手がバンタム級2位、その他の2・3種目に入賞をみた程度であった。

いよいよ待望の第18回大会（1964年）は明年日本の首都東京で開催されるのである。勝つためには人間の総合的な体力を十分に発揮しなければならないが、それには身体的な全能力と、機能ばかりでなく、これに精神的な要素をプラスして初めて成し遂げられるものである。

従って生理的、力学的現象を充分にえ考た、科学的な研究が是非必要ではあるまいか。その国の競技の状況は民族の優秀性、国民文化の水準を示すバロメーターであるといわれているが、それは体力プラス技術、それに精神的な諸要素が加ったものが競技の成績となることからいわれた言葉である。又そのことが、そのままに勝利のむつかしさに、つながるものである。我々日本国民は、過去のオリンピックを深く回顧して国全体が力を合せて、来るべき東京オリンピックには必ず立派な成績を挙げるべく、最善の努力を致すべきである。

回数	年 代	開 催 地	参加国	備 考
1	1896	アテネ	13	日本不参加
2	1900	パリ	20	日本不参加
3	1904	セントルイス	11	日本アイヌ人特別参加
4	1908	ロンドン	22	
5	1912	ストックホルム	23	日本正式初参加
6	1916	第一次世界大戦で中止		
7	1920	アントワープ	29	
8	1924	パリ	44	
9	1928	アムステルダム	46	日本陸上水上初優勝女子種目はじまる
10	1932	ロサンゼルス	39	日本男子水上5種目を制覇
11	1936	ベルリン	54	日本女子水上初優勝
12	1940	第二次世界大戦で中止		東京開催予定中止
13	1944	第二次世界大戦で中止		ロンドン開催予定中止
14	1948	ロンドン	58	日本不参加
15	1952	ヘルシンキ	69	日本戦後初参加レスリング初優勝
16	1956	メルボルン	67	日本レスリング全員入賞
17	1960	ローマ	86	日本体操総合で初優勝
18	1964	東京（予定）		